



『キャリアガイダンス』編集長
赤土豪一

大学卒業後、株式会社ベネッセコーポレーションへ入社。マーケティング・教材開発に従事。その後、株式会社リクルートマーケティングパートナーズ（現リクルート）に転職し、スタディサプリにおける高校生向けキャリア教育プログラムの開発に従事。『スタディサプリ進路』編集デスクを経て、2021年4月より現職。

価値観が多様な時代を どう捉えるか

特別対談



『月刊高校教育』編集担当
二井豪

大学、大学院で教育学を学び、修了後に学事出版株式会社に入社。『月刊高校教育』編集担当として、20年近くにわたり月刊誌を制作し、『高等学校 真正の学び、授業の深み』『校則が変わる、生徒が変わる、学校が変わる みんなのルールメイキングプロジェクト』など、同社の高校教育関係書籍の編集も幅広く手がける。

今調査の「これからの社会は生徒にとって好ましいと思うか」への回答では、「あまり好ましくない」が51%、

「非常に好ましくない」が4%で、合計55%。前年の合計値36%から大幅増で、自由回答ではこんな声が目立ちました。

「自分で考え行動できる生徒にはいくらでも道は開けている。反面そうでない生徒には厳しい」(京都府／公立／専門学科)

「全員が全員、論理的思考力をもって物事に前向きに柔軟に対応できるわけではない」(山口県／公立／普通科)

「情報量が多く、取捨選択が大変。主体性のある者は良いが、多くの生徒には生きづらい」(大分県／公立／その他)

ほかにも生徒の「二極化」「格差」を懸念する声は多々あり、この課題について教育誌の編集者による対談を行いました。

——今回の調査では、生徒にとってこれからの社会は「好ましくない」とする回答が増え、自由回答では生徒の二極化を懸念する声も目立ちました。価値観が多様化し、答えのない課題に向き合うことが求められるなかで、「自ら問いを見つけて行動できる生徒はいいが、言われたことだけやる生徒が心配だ」と。将来必要と思われる能力は「課題発見力」が2位ですが、その力は大半の生徒にまだ備わっていないと先生方は感じています。一方、生徒が現在もつ力の1位は「規律性」。こうしたギャップをどう捉えていけばいいでしょう。

二井▼そのテーマは私自身、悩ましいと感じています。生徒が自ら問いを立てて探究する学習を、私たちも書籍や雑誌で推してきました。ですが、その方向に振れすぎた面もあるように思うのです。先生方からはこんな本音もお聞きます。地元の企業の人は「とがった人材でなくても、きちんと仕事をしてくれればいい」と言っている。社会の変化、高校生の現状、身近な社会が求めるもの、それらを勘案すると、学校教育で何を指すのが最適解なのでしょう。

規律性のある生徒は、役割や約束を大事にできる面を正當に評価されてほしいです。とはいえ「この子はそ

れでいい」と大人が枠にはめると、課題発見力などを伸ばせる可能性を閉ざすようにも思います。

赤土▼「課題発見ってそんなにたいしたことないよ」という感覚を、皆さんでもう少し共有できるといいように思います。高校生にお話をするとき、すごい発見も小さな気づきから始まることを実例で紹介し、誰にでもチャンスがあることを伝えようと、わりと顔がほころぶのです。

こんな事例もあります。ある工場ではなぜか水曜日だけ不良品が多く、外部のコンサルタントが「ドアの開閉の影響では」と思いつき、調べてみると、水曜日に多数の業者が入りしてほこりが舞うためだったと判明し、改善して何千万円ものロス削減につながったそうです。この話が示唆に富んでいると思うのは、「外部の人だから気づいたのか」という点なんです。自分たちでも発見できるとよいのですが、そうした視点をもちにくいのか。どう思われますか？

二井▼面白いですねえ。現場の人たちも、ふと思ったことはあっても、誰にどう伝えればいいのか、方法がわからなかったのかもしれない。個々の課題発見力のあるなしの前に、「安心して自由に発言できる環境かどうか」が問われると言えいいでしょうか。

学校現場も似ているように思います。
『みんなのルールメイキングプロジェクト』という、生徒主体で校則を見直す活動を1冊の本にさせていただいたのですが、活動に関わる大人の方々は、答えのない課題と向き合ってた議論することを、普段から楽しまれていると感じました。そうした人と一緒に、高校生の発言もどんどん増えていったんですよ。

赤土▼弊社では『高校生Ring』というアントレプレナーシップ・プログラムを展開していて、高校生が自分で見つけた課題を社員と1対1で話す機会があるのですが、その場で固まって押し黙ってしまう子もいます。それでもポツリと出た言葉にこちらが寄り添っていくと、少しずつ自分を出せるようになり、最後には「私がこの課題を何とかしたい」と堂々と話してくれます。生徒が自分を出せる場合は、先生方もつくり出すとされていますし、今後はその環境による変容も期待できると思います。ある学校では、キャリア教育で「なぜ働くのか」を問う際に、選択肢から選ばせるか、自由記述にするかを議論し、先生方が「最初は書けなくてもいいから、まずは自由に書かせたい」と望まれました。そのことが印象に残っています。

二井▼今の話で思い出したことがあります。

ます。私は高校生のとき、選択科目で嫌いな美術を取るはめになり(笑)、授業で課された自画像すら嫌がっていました。すると美術の先生が「描かなくていいですよ、鏡で自分の顔を見てみてください。目はどうなっていますか？ 鼻は？ 口は？」とおっしゃったのです。次の時間もその調子でした。そうして自分の顔を眺めていたら、描いてもいいかと思えてきて、最終的に下手なりに満足のいく自画像を描けたのです。美術にとどまらないことを教わったように思います。

赤土▼本誌の「体験から学ぶ」の特集(Vol.4)で、『探究する力』の著者の市川力さんに高校生へのワークシヨップをお願いしたのですが、まさに同じようなスタンスでした。気になるものを見つけてスケッチして発表するワークでしたが、生徒にやらせるというより、「おっちゃんと一緒に楽しみたいんだ」と自分が夢中になり(笑)、つられて生徒が勝手に動き出したのです。こうすべきという予定調和を崩し、自由にできる余白をつくると、高校生も自分を出しやすくなり、気づきを得やすくなるのかもしれないね。

——進路や人生設計についても選択肢や価値観が多様化し、「自分の軸をもつ生徒には道が開けていくが、そうでない生徒が苦しい」という回答が複数ありました。先生方も「こうする」という将来像を示しづらくなつたように思います。

二井▼選択肢や価値観が多様になったというよりは、ICTの発展で膨大な情報が入ってくるようになり、「もともと多様だった生き方が、誰にでもよく見えるようになった」ことが大きいのでしょね。高校生が広い視野で進路を考えられるようになり、それ自体は良いことだと思います。

赤土▼別で行った高校生価値意識調査でも、SNSや動画サイトで情報を集めて、自分のいろいろな可能性を見つけようとしている高校生は、10年前よりも確実に増えています。

二井▼一方で、多様だから「自分で考えてごらん」でいいのかと言えば、「それは無責任で生徒によっては酷だ」とおっしゃる先生も多く、私も同感です。将来の予測が困難な時代と言われますが、だからこそ先生方は「私は

私たち大人が

多様な姿を見せられるように



こう思う」という個の意見をもっと伝えていいのではないだろうか。生徒の考えとは違い、立ちはだかる壁のような存在になることもあるかもしれないが、その対話によって本人の考えが深まったり、救われたりすることもあると思うのです。

また、進路選択では「社会で何々をしたいからこれを学ぶ」という明確な思いをもって選ぶのもしばらしいのですが、人生100年時代、「卒業後にさらにいろいろ経験し、迷いながら道を見つけてもいい」と考える余裕もあつてほしい気がします。

赤土▼ではその一例として、「なんとなく大学の商学部に進んだ」私のケースをお話させてください(笑)。大学では地域のお祭りに人を集めることや、サークルの新入生勧誘にのめりこんだのですが、3年生になったときに知人にこう言われたんです。「夢中になった体験を因数分解したら、共通項が見つかるのでは」と。私にとつてそれは「アイデアで人を動かす」とことで、いわばマーケティング。商学部でこそ学べる領域でした。私はそのとに2年以上気づかず、機会を逃したのです。その後悔から、就職活動はマーケティング職一本に絞るのですが、今思えばこれも極端でした。社会人になり、マーケティングから編集

業務まで経験するなかで「面白いものを届ける」本質は同じだと感じ、職種や業種を越えた共通項もあると気づいたからです。その経験からすると、進路のサポートというのは、志望する学部や職種を明確にさせるというより、生徒の体験から「共通項となる好きなことや得意なこと」を見出し、その軸をもつて次に向かえるようにすることのように感じています。…辻先生、いきなり振ってしまつて恐縮ですが、この点をどう思われますか？(辻先生は民間研修で編集部に在籍する現役教師。欄外も参照)。

辻▼：そうですね、私も進路相談では生徒の思いをまず聴き、言語化を促していました。生徒の志望大学や学部について「なんで？」と問い返し、納得できるまで話し合う先生もいらっしゃいました。進学意識が変わるそうです。ただ、「生徒にとつて壁となる先生」は私も必要だと思っています。ですから、ほかに聴き出すのがうまい先生がいるときは、あえて厳しいことを言う側に回ることもありました。

二井▼それが多様性ですよ。先生のあり方だつて多様でいい。私たちは多様性と言いながら、実際には何かを一方向に揃えたがる傾向がまだ強いように思うのです。高校生が自分に合った生き方を考え、意思表示もで

高校生が自分の価値観に 気づくことのできる場を

きるようにするには、まずは私たち大人が多様な姿を見せていくことではないでしょうか。そしてその役目は先生だけに背負わせるものではなく、保護者や地域の人、企業の人、育児中の人など、いろいろな人で担っていくのだと思います。だからこそ探究活動をはじめとして、学校教育のなかに多様な人との出会いがあつてほしいとも思っています。

赤土▼そもそも自分がどんな価値観

をもっているかは、普段の思考行動のなかではなかなか気づきませんよね。多様な人との出会いや、異質な場所での体験を通して、本人に気づきをもたらす。その体験から何を感じたか、安心して発言できる環境のなかで問いかけ、言語化を促す。学校と外部の協力者が力を合わせてそうした学びを実現することで、高校生のなかに思いを育み、自ら一歩踏み出せるように後押しができれば、と思いました。



※辻 泰範先生…私立高校に11年、県立高校に6年勤務し、現在リクルートで民間研修中。担当教科は商業。